

しんしゅんさんか
新春讃歌

■ 楽曲データ

歌詞：藤範あきら 作詞

楽曲：大栗裕 作曲

発表：—

初演：—

初出：—

管理番号：M2485

■ 創作の経緯

資料の状況から、1960年代末の作曲と考えられる。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第3巻収録

底資料：『新春讃頌』謄写版

比較資料：作曲者自筆譜

校訂の詳細：特記事項なし

■ 解説

新たな年を仏さまとともに迎える喜び——《新春讃歌》で歌われる感情を一言で表すなら、このようになるでしょう。朝のまだ暗い内に皆で集い、手を合わせていると、時の経過にもなって、新年の光がゆっくりにお御堂に差し込むように、私たちの心のなかにも光が満たされていきます。厳かで静かな感動が広がる瞬間です。

一月の法要や行事にちなんだ仏教讃歌といえ、御正忌報恩講で親しまれてきた《旅ゆくしんらん》や《報恩講の歌》などが挙げられます。とはいえ、これらの曲は「お正月らしさ」を備えているわけではありません。その点《新春讃歌》は、詞の古風な言い回しと、それを包む懐の大きなメロディーが典雅な雰囲気をつくり出しており、タイトルの通り、年初めの改まった場にふさわしい曲になっています。

◆ 作品について

作詞は、僧侶の藤範晃誠（1899～1978）です（藤範あきらは作詞時のペンネーム）。

作曲は、京都女子大学教授で龍谷混声合唱団の常任指揮者を務めるなど、浄土真宗と縁の深かった作曲家の大栗裕（1918～1982）。1960年代に創作された

ようですが、その経緯はよくわかりません。

◆歌い方のヒント

曲全体に渡る敬虔さを表現するために、しっかりとお腹で支えた芯のある豊かな声が必要とされます。メロディーの円やかなイメージを頭に描きつつ、フレーズの最後まで良い音色が維持されるよう、息をコントロールして歌いましょう。

音楽的には、18小節目からの「顔ばせのごと〜」で一度頂点に達しますから、その後仕切りなおすようにして1・2番かっこに入ります。「われらが」の各音についてのアクセントは、鋭くなりすぎないように気を付けてください。3番は、音楽の大きなうねりが最後の「南無阿弥陀仏」へ集結するように持っていきましょう。

解説執筆：石川紀久子（和歌山教区和歌山西組西住寺門徒）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第224号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.